

## 道徳・特別活動

根深得英

昭和48年4月に東京都教育委員会に教諭として採用され調布市立第四中学校に赴任した際に驚いたことは、

- 1 行事がたいへん多く授業がかなりカットされていたこと。
- 2 道徳・特別活動がそのカットの対象となりあまり実施されていなかった。

教科の指導については教科書を編成できる力のある教員がいるほどではあるが、道徳の指導には消極的な教員が多かった。授業の実施については教科・道徳・特別活動とも足りない状態だった。

教育実習を地方の青森市立浪打中学校で行った。私には、2週間という短い実習期間中に青森市の教育研究会が教科と領域で2回行われその両方とも参加できた。実習の指導教官だった鈴木先生は道徳、特別活動とも学級の中の課題を拾い上げ生徒たちが学級活動の課題として話し合いを行い、道徳的な指導項目に結びつけ話し合うように指導されていた。その体験から判断すると東京での道徳・特別活動の指導状況は目を覆うほどひどいものだった。その中で可能な工夫をして特別活動・道徳を聴覚教材をも時には使いながら、少しでも多く指導していった。同僚からは「やらないのが普通」教員と比較して「少しでも指導」という教員は奇異に映ったようだ。学校には年間計画はあったが、教科以外は計画だけあって実態がなかった。

教員3年目で生徒会指導担当の教員となり、半年をかけて生徒会指導を突破口にして、生徒会役員がリードする形で特別活動が活性化していった。各学級での話し合いを学年でまとめ、学校全体での話し合いに高め、学校全体の生徒

会の決定を学年、学級で実施できるように相互の連携を義務化する方向で指導した。話し合い、決定の内容は行事だけではなく、授業、授業態度、授業時間確保、生徒指導上の課題の解決など学校生活の全てに関わることであった。その結果

- 1 特別活動の学級活動、生徒会、学校行事が連携し合い全校の学級活動の時間がたいへん活性化した。朝は放送を活用して学級の話し合いのポイントを放送し、その話し合いの集約を放課後の代表委員会で行うようにした。各委員会に関係のあることは関係委員会で集約し代表委員会に報告した。
- 2 学校行事の企画を生徒会役員を中心に企画ができて全校的に各委員会の行事の分担、学級の分担が自分たちで決めて実施できるようになった。例えば文化祭は開会のあいさつは校長が行うが、司会や照明、舞台そして幕間など全て生徒が企画し実施した。教員は座って見ているだけで良かった。たとえ見学態度が悪い生徒がいたとしても係生徒が注意していった。教員が指導する場面はないほど生徒の責任感は強かった。それは自分たちが企画したから責任を持つ認識が高くなったようだ。失敗すると次年度は縮小か中止かと思っていたらしい。
- 3 学校の年間行事計画を生徒会役員が中心に作成できた。内容は行事だけではなく期末考査や考査前の諸活動の時間制限、放課後の学習や予想問題作成まで考えた上で、授業時間の確保まで考えた。生徒会役員で年間の授業時間をカウントして行事への要求だけではなく学校の運営の一部の責任まで感じていた。

4 朝礼、集会の企画・運営はほぼ生徒会、委員会で行った。例えば朝礼は前の週のうちに整列担当の委員会とその仕事内容を決め、朝礼の委員会の発表順、退場指示の手順等まで綿密に準備した。当日、教員は急な打ち合わせがあって朝礼に遅れたが、生徒たちが進めていたので特に違和感もなく進んだということもあった。教員は自分たちが「遅刻した」という印象がぬぐえず、生徒会が主役で進める集会には教員からは人気になかったが、異議は唱える教員はいなかった。更に1年間生徒会役員指導を担当し、ほぼ生徒が主体的に年間行事に関わり、生徒指導の解決に関わり、学習の向上に関わることは常態化した。そして、一度ではあった生徒会長が職員会議に参加して「行事についての希望」を意見として発言した。生徒、教員ともかなり緊張していたが、画期的な試みであった。希望した内容は事前に生徒会担当の私から連絡したので、職員会議で承認された。生徒会役員を始め生徒は大喜びで、更に日々の学校生活の改善に意欲的になっていった。

新任校4年で転勤することとなったが、私の転勤後1年間は生徒が主体的に考えた特別活動が行われたようだ。転勤した学校は新設校であったが、母体校から分かれる形での新設校で、ほぼ母体校の教員で運営からいわゆる分掌組織の分担が決まっており、他からの転任者はさしさわりのない分担をいただいた。生徒会役員担当は母体校よりの教員であった。生徒会の役割は主体的に行事など関わり運営するというよりは教員が計画した行事のお手伝いであった。生徒会だけではなく他の分掌組織も母体校中心であった。また前任校と比較すると生活指導に要するエネルギーが膨大に多かった。生活指導がたいへんなゆえに「生徒には任せられない」というところであった。道徳・特別活動は前任校に比較して幾分かちんと取り組んでいるが計

画は紙上のものであって実態とは異なるという。改善に取り組む前に生活指導の問題が起こり前へ進まなかった。生徒を力で押さえ込むことで精一杯で、結局力で押さえ込むことはできず、反発が大きくなり新たな問題の発生へとつながっていった。5年間、生活指導に追われ転勤となった。その間、新任であったが途中で去っていった同僚もいた。その時は考えが及ばなかったが、根本的に「学校経営の方針の違い」だったと今は考える。生徒のうちに潜んでいる力、自ら正しく生きようとする力を引き出すことが重要であった。

その後小金井市立小金井第一中学校へ転勤となった。前任校とは違う意味で生活指導が荒れていた。この学校でも生活指導に追われる日々となった。教科についてはより計画的には進んでいるが、道徳、特別活動は年間計画はあるが学年ごとに指導内容は異なり、計画通りではなかった。生活指導の荒れは1年である程度収まった。

ここで着手したのは特別活動の校外学習の中学校3年間を見通した計画の作成であった。それまではその都度その都度遠足などを学年で企画し実行していたが、入学時に3年間の校外学習の計画を学年経営計画の中に盛り込んでいった。入学時には保護者に資料として示せるものを作成した。

例) 中学校3年間の特別活動の中にある屋外・野外活動を通して

1. 各教科の授業で培った能力を基本に更に生徒の意欲をこの活動を通して伸長させる。
2. 学校外での活動を通して社会性・マナーを養う。
3. それぞれの活動の中で班・学級・グループの親睦を経験し真の友情を理解させる。
4. 学校内では学びえない内容(真に生き抜く力・国際理解につながる知識・自然に親しむ・多くの文化遺産に接する)身につけさせ生徒の自己実

現の一助とする。

5. 集団行動・集団訓練を通して協力・忍耐・責任を理解させる。

#### 第一学年

一学期遠足 関東で行なわれる、しかも首都圏内で行なわれる横浜万国博覧会(3月25から10月1日)を通じ上記の目標の第一歩を築く。

二学期遠足オリエンテーリングとし自然にしたしむと同時に班・グループの協力を促進しかつ社会科の郊外学習の場とする。

#### 第二学年

一学期遠足オリエンテーリング・飯盒炊爨とし自然に親しみ集団行動の中に[食]を取り入れることにより、より現実的に協力・忍耐・責任を身につけさせるとともに、移動教室の事前指導の一貫とする。

二学期移動教室 宿泊をとまなう行事を通し、真の友情を培う。自然に親しむことと自然にチャレンジし自分の体力に自信をもたせる。班単位、学級単位の登山を通し協力・助け合いの心を養う。

#### 第三学年 修学旅行

上記の目標の完成に向けての行事であるが、第一学年一学期より十分に保護者の意見を聞き保護者の意向をできるだけ取り入れて実施する。

卒業社会体験 卒業期を迎えて中学校教育の完成の方法として出来れば労働経験を養う。

終わり

以上の校外学習の計画の内容には特別活動のポイントとなる学級活動、生徒会活動、学校行事と深く関連し、それまでのある時期だけの校外学習の計画だけではなく他の特別活動の綿密な計画の作成を促すこととなった。

昭和63年度に多摩地区教育推進連絡協議会委員に推薦され委員となった。この協議会は多摩地区28市町村の地域から各地域1名のみ参加となるもので、ある地区からは教育長、ある地区からは指導主事、ある地区からは教頭、ある地区からは校長、ある地区からは教諭という

ように名誉であり実力を求められるものであった。その第四分科会の所属し道徳教育の研究を進めることとなった。東京の公立小中学校ではまだまだ道徳授業の実施が不完全な学校がほとんどであった。委員として参加しているメンバーは道徳の指導項目は熟知し、実践しているまたは自校内の教員に指導している方ばかりであった。主な研究内容は道徳と・特別活動・行事を関連づけた道徳指導であった。「望ましい生き方を学ぶ道徳の指導」という具体的な研究主題のもと当時使用され始めたパワーポイントを使用しての発表で、発表者という光栄な役を担当した。多摩社会教育ホールで行われた発表会の研究集録は多摩地区の公立小中学校教育委員会、東京都教育委員会管轄に配布された。その後、勤務校では複数の主任を兼務した。一つは保健主任、一つは進路指導主任であった。進路指導主任としては第1学年に所属し、学校全体の進路指導並びに3年生の進学指導を担当した。このような主任兼務、進路指導で進学指導を第1学年所属で担当することは組織上初めてのことであった。各学年の進路指導の状況を特別活動、道徳、行事との関連から計画し年間計画を作成した。また、進路通信「未来をめざす」を週に一度発行した。各学年の進路指導指導の状況と保護者からの意見を掲載していった。更に特別活動の各学年で活用できるワークシートを作成するとともに、その使用結果を集計した。1年間のまとめとして進路通信、ワークシート、その集計、学校よりの進路・進学関連の便り等を綴り込んで冊子として完成させた。この取り組みで、特別活動と道徳を関連させた年間計画の作成が勤務校では標準化されていった。更にPC活用の研究授業を担当した。多摩地区の中学校、中学校数学としては初のこととなり、コンピュータ室には入りきらない見学の教員があふれていた。その後2年間勤務して転勤となった。

教頭として赴任することとなった調布市立第五中学校は課題としてその当時選択教科の実施ができるかできないか微妙な学校であった。また、教職員の服務が乱れと生活指導の荒れがあった。校長の補佐として教育課程の管理、進行の把握があったが、更に校内人事も行い、多くを教職員の服務管理と生活指導の後処理に追われた。教科指導への新たな開拓・発表は「ティーム・ティーチング」という当時導入された指導法での研究発表であった。教員とともに補佐の教頭として研究授業に参加できた。TT授業としての公開は多摩では初となった。また、PC活用を各教科に広める役割も担ったので、PC活用について教職員への指導と他校の管理職へのお手伝いが多くなった。道徳・特別活動については手が回らなかった。5年間、勤務し教職員の服務については調布市内では一番整頓されたと考える。

平成9年、校長として町田市立鶴川第二中学校へ赴任した。ここでは選択教科が全く実施されおらず、実施まで2年間を要した。教頭と教務主任が頑強に告示・通達を実施する考えがなかったためだった。選択教科実施で特に混乱もなく進んでいった。

また、総合的な学習の時間が導入される時期だった。総合的な学習の時間については特別活動の指導の内容と被るもしくは特別活動の行事を実施することが総合的な学習の時間の内容だからとどんどん行事を実施することを進めるべきだと全国学校行事研究協議会が打ち出すなど、出だしから混乱していた。赴任した学校では特別活動と総合的な学習の時間の違いを明確にし、学校としての実施の方法を明確にした。実施にあたって、学年の段階では学年行事を総合的な学習の時間に充てようとして、校内で更に特別活動と総合的な学習の時間の違いそして道徳との違いを討論することにより教員一人一人が意識するところとなった。かなり適切な形で

総合的な学習の時間はスタートした。また、道徳についてはICTを活用した道徳授業を試みた。ICTのメール機能を活用し生徒同士の意見の交換を「挙手」によるよりもより気軽にできるようにした。生徒の反応はたいへん良く、生徒同士の意見交流を高める発端となった。簡単なメールによる意見交換後は直接言葉を交わすことも気持ちを楽にできるようになった。4年間でほぼ学習指導要領通りの教育活動が日常的に実施できるようになって転勤となった。平成13年4月に教員として初めての東京都の区部の中学校での勤務となった。その中野区立第一中学校では総合的な学習の時間はほとんど手つかずの状態であった。総合的な学習の時間の意義・意味そして導入・展開・事例まで校長自らが教員に説明しなくてはいけなかった。これまで経験した多摩地区の学校とは異なり、自分の知識がないことには教員は従順であり、ついてくる。決まったことは異議無く実施する傾向があった。理解せずに実施していることもあるので、理解しているかどうか確認が必要であった。そのような状態であったので、特別活動と道徳と総合的な学習の時間についての違いや指導のポイントなどは割と素直に浸透していった。

道徳指導については、ICT活用の授業が割と得意な教員が多かったので盛んであった。道徳の指導項目に沿って前日の新聞などのニュースから指導項目を探して、PC、プロジェクター、スクリーンを教室に設置して生徒にニュースから道徳的な課題を見つけさえ、自らの意見を述べる指導をしばしば行った。一つの学年が2クラスだったが担任が綿密に打ち合わせて、機材も2セット用意して進めた。道徳の指導資料の紙上で自ら考え意見をまとめるよりも視覚を生かした方が意見が出やすかった。

※中野区立中野第一中学校の生徒全員はICTの活用については、ワープロ・パワーポイントにより作成したものをプロジェクターで投影

し説明できるようになっていた。

総合的な学習の時間の指導が定着し道徳、特別活動、教科の指導が順調になったところに急ではあるが千代田区立九段中学校への転勤となった。後1年は中野区で勤務すると教育委員会より伝えられていたのだったが、意外な転勤だった。

平成15年4月、千代田区立九段中学校へ転勤となった。後で発足する千代田区立九段中等教育学校(母体校は九段中学校と九段高等学校)の準備と九段中学校の廃校処理が大きな任務であったようであった。

九段中等教育学校の開設に向けて、中等教育学校(中高一貫校)の新たな特色のある教育課程の創造が課題であった。

一つは「いじめのない学校」のための「道徳指導」、一つは特別活動の中の進路指導での「キャリア教育」の創設であった。

「いじめのない学校」「キャリア教育」ということでピアサポートという考えを取り入れた指導を展開することとなった。ピアサポートは千代田区教育委員会よりの推薦で上智大学の研究グループの協力で無料で展開することとなった。特別活動の枠組みの中で体験的に二人の生徒同士のペアでピアサポートの実際を生徒が学ぶことになり、統計的に資料も大学が集計し分析をしていただいた。「自分のこと、他人のこと」を考える上で効果的かと推察した。約一年後にお礼を兼ねて上智大学に訪問すると「謝金の要求」があり、当初から無料ということだったので用意していなかったものでポケットマネーも含めて用意したが、要望の金額にはいたらず、期待に添えない金額をお渡しした。後日、「謝金」について他の中学校で上智大学の同じグループのピアサポートを取り入れている学校に問い合わせると、一桁多い金額ということがわかり次年度は予算が準備できないので見合わせることにした。そして、翌年はアサーティブ・コミュニケーションを取り入れた特別活動ということ

で町田の桜美林大学の荒木晶子先生のご指導を仰ぎながら学生とともに自分のこと、他人のこと、異文化理解とともに指導に入っていた。交通費程度の謝金ということで快く九段中学校に足を運んでいただいた。「相手のことを十分知って、自分のことをやがて理解してもらう」というコミュニケーションの手法は子どもたちにも、保護者にも分かりやすかった。全体での特別活動としての集会でも、各学級でも体験的に学び、やがて道徳での発言内容も相手を思いやりながらかつ自分の気持ちを伝えようとしているように感じた。そして「キャリア教育」については、全国教育工学会研究発表会で発表を見て東京大学大学院生より情報を得て「グランドキャリアデザイン」の作成を通して生徒たちが自分の資質を見極め、今後身につけるべきことを探していくことと、自分の将来像を未来の転職を含めて作成するという壮大なものである。教職員に時間をとって説明したが、「中学校では進路指導を通してやがて高校受験という構図」から思考が抜け出さずなかなか理解は得られなかったが、校長により直接生徒に指導したところ、生徒の方が反応は良かった。千代田区立九段中学校は赴任して2年間で廃校となり、転勤となった。

調布市立第七中学校へ平成17年4月に赴任した。学校二期制を早くから取り入れて、学校二期制の研究発表会を行いその研究集録もあった学校だった。教育委員会よりは二期制を三期制に戻すように指示があり、三期制の体制の定着1年を要した。更に研究集録とは異なり授業実施時間数がかなり少なかった。またチーム・ティーチングでの加配教員が配置されていたが、定められた通りに教室で指導についておらず、服務上の大問題を抱えていた。それも改善したが、一旦「楽な方向」に舵取りしたものを直すのにはたいへんな抵抗があった。教育課程内の道徳、特別活動の改善になかなか力を注

ぐことはできなかった。それでも「グランドキャリアデザイン」という考えでの特別活動の中の指導はある程度教員に理解され、これから社会で必要とする資質は教職員・生徒ともに感じてくれたと推測する。虚偽の教育活動の上に築いた研究は更に虚偽の教育活動を作り身動きが取れないところまでになり、次の校長での改善はかなりたいへんになるということを経験した。そのことには調布市教育委員会もうすうすは分かっていたようだった。

その後、墨田区立堅川中学校へ校長として教員として最後の3年間を勤めることになった。23区内の学校ということで、校長の改善策には教員は従順に協力的になってはいた。しかし、教育課程上では実施授業時間不足、道徳授業の回数不足・内容の無さ、特別活動への知識不足、総合的な学習の時間への取り組みのレベルの低さ、校内飲酒の問題等かなりの課題が数多くあった。しかし、地域は古い下町で「お祭り」に協力する学校・教職員であれば教育内容での大きな異議を申し立てることはなく協力的で寛容であった。

まずは総合的な学習の時間の改善から始めた。このことはもう教員には有無を言わずに進めたのですぐに改善が図られた。次に特別活動の改善だった。学級活動・生徒会活動・学校行事というしきりがあることと年間行事計画と指導項目について、特別活動に長けている他校の副校長に講師を引き受けてもらい、校内研修を行った。特別活動には主に学級活動、生徒会活動、学校行事があることを中心とした講義だった。初めてそのことを理解した教員もいた。3ヶ月後校内の研究授業として2年生で学級活動の指導項目(悩みとその解決)を実施した。この後は年間指導計画と指導項目をうまく組み合わせ特別活動が展開されていった。次年度の計画では特別活動、道徳、行事を関連づけての作成が行われた。また、生徒が主体的に考え活

動するということでは学年によっては1分間スピーチを取り入れ、学年集会で順番にスピーチを披露するようになった。このことは現在も引き継がれていた。

道徳についてはそれまでの年間計画に沿って道徳授業を実施する学年と道徳ではないものを実施する学年があった。九段中学校でご指導をいただいた牧野貞夫先生のご講演を校内研修でいただいて

1 道徳授業時には黒板に第〇〇回と指導項目を板書すること

2 文章(本文)を読むときは生徒に読ませないで教員が読むこと

が教員への講演の主な内容から得た具体的な内容だった。道徳は分掌上では進路学習指導部に位置づけられていて、年度を越えても当該分掌から各学年の道徳担当へと引き継がれていった。年間計画も特別活動との関連、行事との関連、総合的な学習の時間との関連で作成し直した。

そして、学習指導要領の改訂後の全面实施に向けて校内での改訂内容のポイントの説明を校長がパワーポイントを使って、総則、各教科、道徳、特別活動、総合的な学習まで教員に説明を行った。道徳、特別活動に関しては以下の内容である。

#### 〔道徳〕

23→24項目 21年度より実施

1 主として自分自身に関すること。

- (1) 望ましい生活習慣を身に付け、心身の健康の増進を図り、節度を守り節制に心掛け調和のある生活をする。
- (2) より高い目標を目指し、希望と勇気をもって着実にやり抜く強い意志をもつ。
- (3) 自律の精神を重んじ、自主的に考え、誠実に実行してその結果に責任をもつ。
- (4) 真理を愛し、真実を求め、理想の実現を目指して自己の人生を切り拓いていく。
- (5) 自己を見つめ、自己の向上を図るとともに、

個性を伸ばして充実した生き方を追求する。  
2 主として他の人とのかかわりに関すること。

- (1) 礼儀の意義を理解し、時と場に応じた適切な言動をとる。取り出し
- (2) 温かい人間愛の精神を深め、他の人々に対し思いやりの心をもつ。
- (3) 友情の尊さを理解して心から信頼できる友達をもち、互いに励まし合い、高め合う。
- (4) 男女は、互いに異性についての正しい理解を深め、相手の人格を尊重する。
- (5) それぞれの個性や立場を尊重し、いろいろなものの見方や考え方があることを理解して、寛容の心をもち謙虚に他に学ぶ。  
変更
- (6) 多くの人々の善意や支えにより、日々の生活や現在の自分があることに感謝し、それにこたえる。新

3 主として自然や崇高なもののかかわりに関すること。

- (1) 生命の尊さを理解し、かけがえない自他の生命を尊重する。入れ替え
- (2) 自然を愛護し、美しいものに感動する豊かな心をもち、人間の力を超えたものに対する畏敬の念を深める。入れ替え
- (3) 人間には弱さや醜さを克服する強さや気高さがあることを信じて、人間として生きることの喜びを見いだすように努める。

4 主として集団や社会とのかかわりに関すること。

- (1) 法やきまりの意義を理解し、遵(じゅん)守するとともに、自他の権利を重んじ義務を確実に果たして、社会の秩序と規律を高めるように努める。入れ替え
- (2) 公德心及び社会連帯の自覚を高め、よりよい社会の実現に努める。入れ替え
- (3) 正義を重んじ、だれに対しても公正、公平にし、差別や偏見のない社会の実現に努める。入れ替え
- (4) 自己が属する様々な集団の意義について

の理解を深め、役割と責任を自覚し集団生活の向上に努める。入れ替え

- (5) 勤労の尊さや意義を理解し、奉仕の精神をもって、公共の福祉と社会の発展に努める。
- (6) 父母、祖父母に敬愛の念を深め、家族の一員としての自覚をもって充実した家庭生活を築く。
- (7) 学級や学校の一員としての自覚をもち、教師や学校の人々に敬愛の念を深め、協力してよりよい校風を樹立する。
- (8) 地域社会の一員としての自覚をもって郷土を愛し、社会に尽くした先人や高齢者に尊敬と感謝の念を深め、郷土の発展に努める。
- (9) 日本人としての自覚をもって国を愛し、国家の発展に努めるとともに、優れた伝統の継承と新しい文化の創造に貢献する。
- (10) 世界の中の日本人としての自覚をもち、国際的視野に立って、世界の平和と人類の幸福に貢献する。

年間指導計画の組み立てとして

情報マナーも指導対象となる

- 1 年間の校内の計画との関連性を持たせる。(行事、教科授業内容、特別活動等)
- 2 24項目を全てにわたりバランス良く配置
- 3 堅川中の地域・保護者・生徒の実態から重要な指導項目は複数回の指導
- 4 日常の学校生活の中から指導資料を求めるとも可能とする
- 5 社会の動向にあわせた、即時性も必要
- 6 指導・展開した内容を学年便り等で家庭に紹介し連携を図る

特別活動

〔学級活動〕 H21 年度より実施

1 目標

学級活動を通して、望ましい人間関係を形成し、集団の一員として学級や学校におけるよりよい生活づくりに参画し、諸問題を解決しようとする自主的、実践的な態度や健全な生活態度

を育てる。

## 2 内容

学級を単位として、学級や学校の生活の充実と向上、生徒が当面する諸課題への対応に資する活動を行うこと。

- (1) 学級や学校の生活づくり
  - ア 学級や学校における生活上の諸問題の解決イ学級内の組織づくりや仕事の分担処理
  - ウ 学校における多様な集団の生活の向上
- (2) 適応と成長及び健康安全
  - ア 思春期の不安や悩みとその解決イ自己及び他者の個性の理解と尊重
  - ウ 社会の一員としての自覚と責任エ男女相互の理解と協力オ望ましい人間関係の確立
  - カ ボランティア活動の意義の理解と参加キ心身ともに健康で安全な生活態度や習慣の形成ク性的な発達への適応ケ食育の観点を踏まえた学校給食と望ましい食習慣の形成
- (3) 学業と進路
  - ア 学ぶことと働くことの意義の理解イ自主的な学習態度の形成と学校図書館の利用
  - ウ 進路適性の吟味と進路情報の活用エ望ましい勤労観・職業観の形成
  - オ 主体的な進路の選択と将来設計

### 〔生徒会活動〕

#### 1 目標

生徒会活動を通して、望ましい人間関係を形成し、集団や社会の一員としてよりよい学校生活づくりに参画し、協力して諸問題を解決しようとする自主的、実践的な態度を育てる。

#### 2 内容

学校の全生徒をもって組織する生徒会において、学校生活の充実と向上を図る活動を行うこと。

- (1) 生徒会の計画や運営
- (2) 異年齢集団による交流
- (3) 生徒の諸活動についての連絡調整
- (4) 学校行事への協力

#### (5) ボランティア活動などの社会参加

### 〔学校行事〕

#### 1 目標

学校行事を通して、望ましい人間関係を形成し、集団への所属感や連帯感を深め、公共の精神を養い、協力してよりよい学校生活を築こうとする自主的、実践的な態度を育てる。

#### 2 内容

全校又は学年を単位として、学校生活に秩序と変化を与え、学校生活の充実と発展に資する体験的な活動を行うこと。

##### (1) 儀式的行事

学校生活に有意義な変化や折り返しを付け、厳粛で清新な気分を味わい、新しい生活の展開への動機付けとなるような活動を行うこと。

##### (2) 文化的行事(旧学芸的行事)

平素の学習活動の成果を発表し、その向上の意欲を一層高めたり、文化や芸術に親しんだりするような活動を行うこと。

##### (3) 健康安全・体育的行事

心身の健全な発達や健康の保持増進などについての理解を深め、安全な行動や規律ある集団行動の体得、運動に親しむ態度の育成、責任感や連帯感の涵養、体力の向上などに資するような活動を行うこと。

##### (4) 旅行・集団宿泊的行事

平素と異なる生活環境にあって、見聞を広め、自然や文化などに親しむとともに、集団生活の在り方や公衆道徳などについての望ましい体験を積むことができるような活動を行うこと。

##### (5) 勤労生産・奉仕的行事

勤労の尊さや創造することの喜びを体得し、職場体験などの職業や進路にかかわる啓発的な体験が得られるようにするとともに、共に助け合って生きることの喜びを体得し、ボランティア活動などの社



会奉仕の精神を養う体験が得られるような活動を行うこと。」

そして特別活動の評価が指導要録に記載することとなったので、いち早くその評価の視点を作成した。作成した内容はここでは割愛する。

特別活動は指導・支援しだいで生徒たちの無限の力を引き出すことができる。小グループ、中グループ、大グループでの主体性を発揮することにより、生き生きとした学校生活を生徒たち自ら作り出していくことができる。このことは現在の学習指導要領の背景にあるものと一致するものと考えられる。世界で活躍する会社でも主体的に自分の考えをまとめて、相手の状況をよく理解して発言していくことは会社内部の初期的な研修手法としても取り入れられている聞いている。特別活動の指導の意義はたいへん大きいものといえる。

道徳授業および道徳の学校全体に渡っての指導は、規範を教え込むのではなく自らがこれまでの体験を振り返り、他の生徒の考えを十分聞いて自分の考えをまとめることによって自分なりではあるが正しい道徳の価値観を構築することが重要である。ここ2回の学習指導要領の改訂で指導項目は21項目から23項目、23項目から24項目と増えたが、増えた項目を規範として教え込むのではなく、生徒一人一人が十分考えて自分のものにするプロセスが重要である。

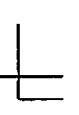
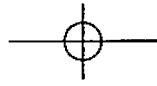
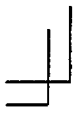
他方、学校の現状は特別活動と道徳の区切りをつけず、行事の選手選びや委員選びなどを行い話し合い活動や指導項目に沿った指導をしていない場合がある。また、道徳に関しての指導者講習会に参加した教員による講習会の内容の周知もあまり行われていない。また、一般的に研究指定校等の学校は研究発表に向けて精力的に研究はするが多くの学校は研究発表終了後はその影響が見られないほどの状態となっている。学校の研究そのものも、研究発表の内容をよくするた現状とは異なる研究集録を作成する

ことがあった。

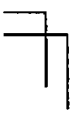
そして教員として採用され教育をつかさどることになった場合、大きな影響を受けるのは最初の赴任校の先輩教員となる。先輩教員の現在の状況そして校内の初任者研修のほとんどの学校で研修内容の不確定、そして研修時間の未確保という不充実な状況では教員が専門である教科、道徳、特別活動、総合的な学習の時間の指導力はつきにくいといえる。初任者が偶然に赴任校で指導力、実力のある教員の教えを受けることがあれば別だが、教員になる前に、つまり大学生として専門の教科の指導力、道徳の指導力、特別活動の指導力、総合的な学習の指導力を身につけておく必要がある。私自身も教育実習では教科の専門性、指導の専門性を高める点について、特別活動の指導力、道徳授業の指導力では「目から鱗」の感激を受けて教員になる決意を固めた。

教職課程を含む大学での教育はたいへん重要である。特別活動、道徳、専門の教科については指導の理論と模擬授業を繰り返して行うことが大切である。その後に教育実習を通して学び、更に教育ボランティアとして中学校に通った学生は公立の教員採用試験での合格もかなり数字としてはよかった。また、私立学校教員への採用もかなり確実な場合が多かった。はじめから服装や言動が教育現場にふさわしくなく、自らが是正できない学生は不合格が多かった。私の校長としての経験からはそのような学生は教育実習の受け入れをお断りしてきた。また教育ボランティアの受け入れもお断りしてきた。断られた学生は確かに教員採用試験は通らなかったようで、民間企業に就職したのもいた。

大学生の身分でいるうちに教職課程の内容を身につけ、教育実習、学習ボランティアを通して力をつけることが重要である。更に、授業の指導案を複数回作成し、実施することが将来の教員としての資質を向上させることになる。



# 《資料編》



### 1. 取得できる教員免許状の種類

学 部	学 科	免許状の種類
社会学部	人間心理学科	中学校教諭一種免許状(社会)
		高等学校教諭一種免許状(公民)
	現代社会学科 (ライフデザイン学科)	中学校教諭一種免許状(社会)
		高等学校教諭一種免許状(公民)
	経営社会学科	中学校教諭一種免許状(社会)
		高等学校教諭一種免許状(公民)
メディア コミュニケーション学部	マス・コミュニケーション学	中学校教諭一種免許状(国語)
		中学校教諭一種免許状(社会)
		高等学校教諭一種免許状(国語)
		高等学校教諭一種免許状(公民)
	情報文化学科	中学校教諭一種免許状(英語)
		高等学校教諭一種免許状(英語)
		高等学校教諭一種免許状(情報)

### 2. 学科別教職課程履修者の推移

	2010年	2011年	2012年
人間心理学科	27	33	21
現代社会学科	8	10	5
経営社会学科	31	27	28
マス・コミ学科	12	13	13
情報文化学科	10	6	4
合 計	88	89	71

(人)

### 3. 2012年度学科・学年別教職課程履修者数

	1年	2年	3年	4年	科目等履修生	合 計
人間心理学科	4	12	0	4	1	21
現代社会学科	1	3	0	1	0	5
経営社会学科	15	7	4	2	0	28
マス・コミ学科	1	8	4	0	0	13
情報文化学科	2	2	0	0	0	4
合 計	23	32	8	7	1	71

(人)

#### 4. 介護等体験

種 別	体 験 施 設 名
福 祉 施 設	江陽台通所介護、千葉県花見川いきいきプラザ、東菅野アイサービスセンター、 流山地域福祉事業所 梅の木、初石苑、コミュニケア 24 癒しの浦安ふじみ館
特別支援学校	千葉県立特別支援学校流山高等学園

#### 5. 学校種別教育実習者数

	中学校	高等学校
実習者数	3	4

#### 6. 教職課程センター年間スケジュール

4 月	学年別教職課程オリエンテーション
	教職履修個別相談 (履修相談室内)
	教職セミナー開始 (1月まで)
5 月	第 1 回 教職ポートフォリオ (履修カルテ) 説明会
6 月	教育実習
7 月	第 2 回 教職ポートフォリオ (履修カルテ) 説明会
8 月	社会科教育教材研究会 (文部科学省・国会・最高裁判所の見学)
9 月	教職課程センター主催・模擬授業合宿 (4泊5日・国立磐梯青少年交流の家)
10 月	社会福祉施設介護等体験開始 (1月まで)
11 月	特別支援学校介護等体験
12 月	2 年生教職履修者個人面談
1 月	第 3 回 教職ポートフォリオ (履修カルテ) 説明会
2 月	教職課程センター主催・模擬授業合宿 (3泊4日・民間施設)

#### 7. 教職課程センター運営委員

センター長			
委 員	宮 崎 孝 治	現代社会学科	教 授
	福 井 嗣 泰	人間心理学科	教 授
	高 橋 克	現代社会学科	教 授
	守 屋 志 保	経営社会学科	准 教 授
	古 田 悟	経営社会学科	講 師
	林 香 織	マスコミュニケーション学科	講 師
	城 一 道 子	情報文化学科	教 授
	波 多 野 和 彦	情報文化学科	教 授